

続 AI はどこまで可能か

2020年5月9日 筒井哲郎

その21に「AIはどこまで可能か」を書いた¹。その後考えたことを続編として書きたい。

1. データ処理の能力増強

私の趣味の世界では、人工知能 (AI) が目を見張る能力を発揮している。毎週日曜日の正午から2時間 NHK の囲碁番組を見ていて、現在もっとも勝率の高いプロ棋士約 50 人がトーナメントを戦って、最後に NHK 選手権者の称号を獲得する戦いである。毎回、プロ 2 段の女性司会者と高段者の棋士が対談しながら解説してくれるが、ここ数年コンピュータ・プログラムがプロ棋士に対して勝ちを収めることが多くなっているの、解説者の話がしばしば「コンピュータでは、この早い局面でも三三に入るのですね。われわれが勉強していたころは、そんな手を打つと叱られたものですが」という。また、10代や20代の棋士たちが本因坊や名人のタイトルを奪取しており、しばしば年配の解説者が「この人たちは、コンピュータの編み出した手筋もよく勉強していますね」と感心している。

AI は人間の能力をはるかに超えた多数の様態を描くことができる。その上で、達成目標が明快であれば、その目標に向かって人間よりも正確かつ短時間で達成することができる。囲碁の世界では、2018年に人間のプロ棋士たちに圧勝するレベルにまで達した。

2. 社会的に形成される文化と価値の評価

個人の様々な希望や願望に優先順位を付けようという場合、AI が判断を代行してくれる場合があるだろうか。さまざまな状況判断や選択肢を描いて見せることは可能であろう。しかし、この人はこの選択をするはずだ、あるいは、この選択をしたら最良の発展の道になる、という選択を提示できるだろうか。仮にそれらしい回答を AI が提示してくれても、その当否を判定するのが当人であったら、やはり成否の判定ができないことになる。

文化的なものがどのように形成されたかを、M. & R. フリードマンは、多くの人びとの集合的な積み重ねによるものだと指摘している²。

言語は、たえず変化し発達しているひとつの複雑な構造だ。それは一つの明確に限定された秩序だが、どんな中央主権的な主体も、そうなるようにこれを計画したわけではない。どんな構造が言語として許されるべきか、文法上の規則はどうあるべきか、どの言葉が形容詞となりどの言葉が名詞となるべきかといったことを決定した人は一人もいない。(中略) つまり、各個人間の自発的な相互の影響を通じて発達してきた。

もうひとつの例は、科学的知識だ。物理学でも科学でも気象学でも、あるいは哲学でも人文科学で

¹ 『筒井新聞』第372号(1) <http://tsutsuineews.html.xdomain.jp/372/372-1.pdf>

² 西山千明訳『選択の自由』日経ビジネス人文庫、2002年、pp.87-89

も社会学でも経済学でも、これらの学問の組織的な構造は、このような成果を生み出そうと誰かが意図し計画的に行った決定のおかげによるものではけっしてない。ちょうど樹木のとっぺんのように、「自然に成長してきただけのこと」だ。そのような構造をもつようになったのは、何人もの学者たちが、そうなった方が便利だと考えたからだけのことだ。しかも、この構造は、今でも現状で定着し固定化してしまっているわけではない。これまでとは異なった必要がでてくるにつれて、現在の構造はさらに変化していく。(中略)

どんな社会であっても、その社会におけるいろいろな価値観や文化や社会的な慣習等は、すべてこれらと同じ道をたどってきた。それらは人々の間における自発的な交換と共同とを經由して発達してきた成果であり、試行錯誤を通じ、あるいは受容されたり拒否されたりといった過程を経て、自然に発生してきた複雑な構造を体現している。

3. 技術的特異点 (シンギュラリティ) があるという説

AI が進んでいくと人間の知能を追い越して、人間の知能がおよばないほどに優秀な知性が誕生するという仮説がある。その時点を「技術的特異点 (シンギュラリティー)」と言い、1 説には 2045 年ごろに来るだろうという説がある。それはどんなテーマについて人間の知能を超えるといっているのだろうか、という疑問を解くために、友人が提供してくれた論文を斜め読みしてみた。吉野敏行「AI(人工知能)とポスト資本主義」という論文である³。〈論文要旨〉をコピーすると以下の通りである。

AI (人工知能) の急速な発展が今後の経済社会にどのような影響を及ぼすか、特に資本主義社会への影響とポスト資本主義社会への展望について考察した。資本主義社会は本来的に資産家と労働者との所得格差を拡大する仕組み (ピケティの $r > g$) をもっているが、先進諸国では、すでに利子率と経済成長率がゼロ水準となり、利潤率も 2%以下に低下しつつある。さらに AI が人間の知能を凌駕する「シンギュラリティ」までに、労働力人口の 5 割から最大 9 割が AI と労働代替すると予測され、資本主義社会はすでに末期状態にある。ポスト資本主義社会は「20 世紀の社会主義社会」とは異なる「理想の社会主義社会」である。基本的人権が保障され、ベーシックインカムが所得原則となり、AI による最適な計画経済が実現される経済成長率ゼロの「定常世界」である。AI は資本主義の終焉と真正社会主義社会を実現する物質的・技術的基盤である。

この著者は、基本的人権が保障される「理想の社会主義社会」が来ると予想している。その条件として「AI による最適な計画経済が実現される」ということが根拠である。本文を見ると著者は、過去の社会主義の失敗を、労働の対価の分配の公平性を保つことに失敗したからだ、と言っている。「労働に応じた公平な分配を意図したけれども、緻密な計算ができなかったためにフリーライダーが発生してしまった。AI はまさしくこの問題を解決してくれるから、社会主義計画経済を成功に導く」と期待を寄せている。

これはすでに繰り返された議論であるが、念のために自由主義経済が重視し、この論者が無視している「計画立案は誰がするか」という問題を述べておく。ソ連や東欧諸国の経済が崩壊したのは、分配問

³ 『人間と環境』7号、2016年 https://www.jstage.jst.go.jp/article/uheok/7/0/7_57/_pdf/-char/ja

題が主因ではない。技術革新が生まれる土壌がなかったからである。自由主義経済の社会の中には無数の好事家が出て、それぞれバラバラに好きなことに熱中する。たとえばAIの基盤であるパソコンはビル・ゲイツのような若者が、だれに頼まれたわけでもなくガレージで試作を始めたのである。もちろん成功者の陰には無数の失敗者がいる。私の聞いた話では、日本にも中小企業を始める起業家が無数にいるが、3年後に生きている企業は1割程度だという。しかし、そのような試みが社会発展のシーズを生むのである。

フリードマンは社会主義的福祉政策がドイツ帝国の貴族主義的な宰相ビスマルクによって、はじめられたことを指摘し、次のように述べている。

貴族主義に対する信奉者と、社会主義に対する信奉者とは、どちらも中央集権的支配を信奉している。そのどちらも命令による支配を信じ、人びとの間の自発的協同を信用していない。貴族主義者と社会主義者が異なるのは、誰が支配すべきかに関してだけであって、いいかえれば、支配を担当すべきエリートが生まれた家柄によって決定されるか、それともその能力に応じて選ばれたと称される専門家であるかどうかによって決定されるか、その違いでしかない⁴。

社会主義を奉じる人々が、生産結果の平等だけを論じて、富を生み出す手段の平等を言わなくなったことについて、1976年のW. アレン・ワリスの次の文章を引用している。

(社会主義は)生産手段を社会所有しろという主張の妥当性が、この百年間を通じて次から次へと粉砕されてきたために、知的には完全に崩壊しており、いまでは生産成果の社会所有化を追求するようになっている⁵。

4. 判定する神

私はこの号の(3)で述べたように、「基本的人権が保障される条件」というのには、一人の例外もなく自由が保障されていると納得できる社会でなければならない、と考えている。たとえば、ガリレオのように、1000人が天動説を信じていても一人地動説を唱えても迫害されない社会でなければならない、大部分の人びとが自由を保障されている、と感じている状態は基本的人権が保障されているとは言えない。その上で、本号(3)に記載したように、人びとの多様な価値観をいくら緻密に把握しても計画経済ですべての人を満足させることは不可能だと私は考えている。

すべてを知悉し、判定する神が存在するだろうか。古代では、神すら民族神であった。ギリシアの神、ローマの神、ペルシアの神、ユダヤの神がいた。民族間で戦争する時、それぞれの神に祈った。近代になると、真理は一つという理性の神観が発展した。その結果それぞれが真理と信じる概念の中に神を投影したが、それらが一致することはなかった。

⁴ 西山訳、前掲書、p.237

⁵ 西山訳、前掲書、p.233

5. AI についての私見

計画経済は、近代の理性的な真理が一つだという判定基準があってはじめて成立する。私はそのような基準を得ることはできないと考えている。だから、AI の発達を疑わないけれども、判定基準のないところにシンギュラリティはあり得ないと考えている。

古代にはヘレニズム世界のあらゆる書物を収集したアレクサンドリアの大図書館が建設された。それが中世から今日にまで思索の基盤を提供する知恵の源泉を提供して来た。AI はどこまでも詳細に知識を獲得するツールとなるであろう。しかし、人間社会に単一の判定基準を確立することができないという事実に立脚する限り、人間を乗り越えて価値の判定や選択をする存在にはなり得ないと思う。位置づけとしては、現代の「アレクサンドリアの大図書館」に相当するのではないか。